

〈書 評〉

船木祝著

## 『カントの思考の漸次的発展——その「仮象性」と「蓋然性」』

(論創社 2020年刊)

中澤 武

著者の船木氏は、一九九三年から二〇〇一年にドイツ連邦共和国のトリアー大学に留学し、十八世紀啓蒙研究の世界的権威ノルベルト・ヒンスケ(Norbert Hinske)教授の教えを受けた。本書は、この間八年余りに及ぶ研究の成果をまとめたものである。原著は *Kants Unterscheidung zwischen Scheinbarkeit und Wahrscheinlichkeit. Ihre historischen Vorlagen und ihre allmähliche Entwicklung* [カントによる仮象性と蓋然性の区別：その歴史的背景および漸次的発展] であり、二〇〇二年に Peter Lang 社から出版された博士号取得論文である。

著者は「あとがき」で「日本語への翻訳は難航を極め」と述べている。これは想像に難くない。ドイツ語で考え書くことと、それを自然な日本語で表現しなおすことは全く別の努力を要するからである。そのため、本書の文面に多少なりとも生硬な面があるのは、やむを得ないことかと思う(たとえば、関係代名詞の直訳である「ところの」の多用など)。かく言う書評子も同じヒンスケ教授の門下として、筆者の苦心と工夫には共感を覚える。とはいえ、ここではドイツ啓蒙の概念史や研究方法についての予備知識を前提せずに、カント哲学への理解を深めたいと望む一読者の立場から管見を述べたい。

本書の目的は、カントが論理学講義の中で述べたとされている「蓋然性(Wahrscheinlichkeit)」と「仮象性(Scheinbarkeit)」の区別について、その歴史的背景を探り(第一章)、一七六〇年代から一七七〇年代初頭にかけてのカントの思想発展の過程を跡付けた上で(第二章)、「ほぼ『純粹理性批判』出版の時期」に明確となった「カント独自の着想」を明らかにする(第三章)ことである。そのため、本書の議論は三つの軸に沿って展開される。

第一の軸は概念史である。第二の軸は、カントの六〇年代著作と七〇年代までの講義録に見られる方法論的発展の検討、そして第三の軸が「ヴォルフ主義者及びその思想に対して、明確な対抗的態度をとるに至る」カントの思想形成を描き出すことである。

十七世紀後半から十八世紀にかけて、ドイツの哲学はほぼ三世代にわたってラテン語からドイツ語学術用語への移行期にあった。クリスティアン・トマージウスによるドイツ語講義(十七世紀末：初期啓蒙)を嚆矢として、クリスティアン・ヴォルフおよびヴォルフ学派(中期啓蒙)、さらにはカント哲学を中心とする後期啓蒙の思想家たちは、相互の影響関係の中で様々に揺れ動きながら、困難な道程を経て哲学概念を確立していった。本書がテーマとしている蓋然性と仮象性の概念も例外ではない。たとえばカントは『純粹理性批判』弁証論の冒頭で蓋然性を「仮象(Schein)」から区別しているけれども(B 349)、筆者によれば、これは決して当たり前のことではなく、むしろ「カントがドイツ啓蒙思想家たちと対決し、非常に苦心して格闘したことの結実」なのである。

そこで本書は、第一章で「当該概念の源泉とその意味の多様性を明確にする」意図から、ラテン語の名詞 *probabilitas* (蓋然性) および *verisimilitudo* (仮象性) に遡り、さらにはこれらの背後に

ある形容詞 *probabilis*(蓋然的)や *verisimilis*(真理に似た、真理の仮象の下にある)までも視野に入れる(本書で多用される *probabile*, *verisimile* は、これらの形容詞の中性単数形)。まずは哲学書以外の一般的な辞書・事典類を幅広く検討し、続いて「ドイツ啓蒙を代表する作家たち」——トマジウス、ヴォルフ、A. G. バウムガルテン、マイヤー、クルージュス)の思想と、蓋然性に関するラテン語用語法を吟味する。

第二章に移り「カントの思考の過程」を問題にする際にも、筆者はラテン語の術語に焦点を当てている。そのため、検討の対象となるのは公刊著作であるよりも、むしろ講義録であり、カントの自筆遺稿(レフレクシオン〔以下 Refl. と略〕)の方である。たとえば、筆者は Refl. 二五九一に注目する。カントはここで「初めて」蓋然性の概念を規定し、これを「仮象性(*verisimilitudo*, *Scheinbarkeit*)と区別」しているからである。この Refl. 二五九一はマイヤーの『論理学綱領』第一七一節に対する批判であり、そこには「クルージュスによる *verisimile* と *probabile* の区別が……影響を与えた」と考えられる。ここで問題になっているのは、「数学と形而上学との方法論的区別」である。

この点に関連して、筆者はカントの公刊著作からベルリン・アカデミーの懸賞論文『自然神学と道徳の原則の判明性』(一七六二年執筆／一七六四年出版)の中に Refl. 二五九一に対する「内容上の根拠」を見出す。数学的确实性と哲学的确实性の相違に関して、マイヤーはこれを「単に認識の度合いの相違に還元」していた(だから用語上も *probabile* と *verisimile* を区別していなかった)。これに対して、カントによれば「数学は総合的道を歩み、哲学は分析的道を歩む」。こうした方法論上の相違が蓋然性の取り扱いにも反映している。Refl. 二五九一によれば「蓋然性は、哲学的事柄においては計量できないのであって、感じられるものである」。この点で Refl. 二五九一は「懸賞論文の水準に達している」と評価される。さらに筆者は、遺稿の年代決定にまで踏み込んで、Refl. 二五九一の成立は——アディッケスの年代決定よりも狭く——「懸賞論文後の時期」(しかも、遅くとも一七七〇年代初頭まで)に設定しようという。

その後、いわゆる「沈黙の十年」の発展史を推定するにあたっては、この時期の講義録が重要である。特に『プロンベルク論理学』および『フィリップピー論理学』の分析から、筆者は次のような結論を導き出す。カントは、ほぼ七〇年代初頭の時期に、マイヤーでは蓋然性に属する要素を仮象性に組み入れる一方で、「仮象性の領域において、識別のための適切な基準を見出すことの困難と必要性を感じている」。そのため、講義録には「人間学的観点」が登場し、「悟性認識に意志が及ぼす有害な影響に関するクルージュスの見解との著しい類似性」が見出され、「敵対者の立場に身を置くことの重要性」が強調される。これらの論点を啓蒙思想と共有しているにもかかわらず、「カントは、ヴォルフやマイヤーとは異なり、仮象性のための判定尺度をさらに実践的道徳の領域に求める。」

この点を引き継いで、第三章では「ほぼ『純粹理性批判』出版の時期」における「仮象的(*verisimile*; *scheinbar*)」と「蓋然的(*probabile*; *wahrscheinlich*)」の概念が論じられる。この章でも、分析の対象となるのはカントの遺稿と講義録である。筆者は、両者の比較分析をとおして次のような解釈に達する。「カントは一七七〇年代後半以降には、蓋然性を部分的真理の一形式に帰属させ、仮象との明確な区別立てをした」。「カントは、さらなる探究を通じて真理に近づきうるような、部分的真理の一形式としての蓋然性と、仮象としての「仮象性(*verisimilitudo*)」の区別立てを前面に押し出そうとした」と。

さらに筆者は、『ペーリッツ論理学』および『ウィーン論理学』の分析に基づき、次のように言う。

「第一に、カントはほぼ『純粹理性批判』出版の時期には、「仮象性」の領域における重要な尺度が、道徳的心術に基づく実践的確信にあることを認める。この確信は、人生のいっさいの利益を賭けてもぐらつかないものである。第二に、道徳法則の実践的必然性が、道徳的信仰の考察において、明確に出発点とされ、その信仰は人間の本質的目的との関連で論じられる。この関係づけによって、道徳的信仰には特別な意義と力が与えられる。以上、二つの要点により、確信と単なる信じ込みの明確な区別立てが確かなものになった。道徳的関心により堅固である道徳的信仰には、最も強力な疑いにも耐えうるほどの力があるのである。」このことこそが、筆者によれば「カント独自の着想」なのであり、そのような思想をもたらしたのは、「*verisimilitudo* と *probabilitas* の区別」に関するヴォルフ主義の思想との対決を通して「仮象性の領域において尺度を探究する」カントの姿勢だったのである。

以上で見たとおり、本書は『純粹理性批判』弁証論の冒頭にある蓋然性と「仮象(Schein)」の区別から説き起こし、いわば公刊著作の舞台裏で数十年にわたって展開されたカントの思想形成を再構成したものである。筆者は、カントの遺稿や講義録という文献学上の問題を含む資料に切り込み、論述にあたってはこれらの資料の「類似箇所をできる限り明らかにして、両文献を補完的に、また相互修正的に用いる」という慎重な手法をとっている。特に「論理学講義を手にして『純粹理性批判』における原文を拡大解釈することは避けられなくてはならない」という理由から、テキスト解釈における筆者の態度は最大限に抑制的である。

その点を認めた上で、さらに書評子は筆者の今後の研究に期待を寄せたい。本書の探究は『純粹理性批判』の背景事情の解明に終始している。しかも、ラテン語学術用語に焦点を合わせているので、ドイツ語による概念形成については勢い手薄となってしまう。では、本書で問題となった蓋然性や仮象といった概念をめぐる、批判期の公刊著作では『純粹理性批判』以後、どのような展開があったのだろうか。

この質問に対する筆者の答えについては、本書でもすでに「人間の尊厳」や「道徳性」といった倫理的価値概念を手掛かりとして、方向性が示されている。筆者には別に近著『響き合う哲学と医療』（中西出版 二〇二〇年四月刊）があって、この中では一七八〇年代のカントの思想形成が叙述されている。そこでは「人間性」の尊厳や道徳性といった概念を中心として、講義活動と公刊著作の両面から、哲学的人間学の発展過程が描き出されている。本書と合わせて熟読するならば、批判哲学の道程がより立体的に見えてくることだろう。